

聖霊降臨節第 19 主日説教 「希望を見つめて」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2021年9月26日

マタイによる福音書 6:5~15

説教に先立ち、私たちは、この日も主の祈りを共に祈るものであります。それは、前回申しましたように、私たちがこうして御言葉に聞いて行くに当り、心を合わせて主の祈りを共に祈ることが、「私たちが私たちである」ことを確認するために欠かせないものだからです。なぜなら、私たちが主の祈りを共に祈ればこそ、私たちはイエス様との繋がりを体感し、神様の御前にあることを深く覚らしめられることになるからです。それゆえ、イエス様も私たちに向かって、この日、「こう祈りなさい」と強く勧めてもいるのです。ですから、礼拝において神様に覚えられているということについては、私たちは何一つ不安や恐れを感じる必要はありません。この一週間、私たちがどんなに自分を見失うことがあったとしても、こうして神様の御前に立ち、主の祈りを共々に祈り、そして、こうして御言葉聞いている私たちは、それゆえにまた、自分自身を取り戻し、再び主の平安のただ中へと導かれることになるからです。では、その私たちが取り戻す自分自身とは一体いかなるものなのでしょうか。

十字架の出来事の直前のことです。ゲッセマネの園で、イエス様は血の汗を流しながら「アッバ、父よ」と神様に向かって祈られました。そして、同じように、神様に向かって「アッバ、父よ」と声の限り叫び、また、祈ることの許されているのが私たちでもあるのです。それゆえ、私たちは神様に対してもイエス様に対しても何一つ自分を隠す必要はありません。つまり、御前に立つ資格云々については、私たちは自らに問う必要はないということです。なぜなら、それを決めたのは神様であって、私たちではないからです。しかし、それにも関わらず私たちが資格云々を問わずにはいられないのはどうしてなのでしょう。それは、ある意味で、私たちが自分自身のことをよく知っているからです。つまり、身の程を知っているということでもあります。それは、主の祈りを祈る私たちがイエス様と同じであるがゆえに、自らの罪

深さ、弱さを思い知らされてもいるからです。ただ、そうした自己理解、自意識は、御前にあって、果たして本当に正しいものだと言えるのでしょうか。

御言葉は「神は愛なり」と語ります。つまり、神様の本性が愛であり、愛ゆえに神様は私たちがこうして御前に招いてくださってもいるのです。そして、それは、私たちを裁き、地獄の底にたたき落とそうとしてのことではありません。主の祈りの中で私たちが「御国を来たさせたまえ」と祈るように、愛ゆえに天の御国へと招き入れようとして、毎週毎週私たちがその御前に招いてくださっているのが私たちの神様でもあるのです。ですから、私たちがもし本当に自分自身のことが分かっているのなら、その資格云々を問うことはありません。こんな有り難い話は他にはないからです。ところが、私たちの多くは、その愛に胸を張って応えることができずにいるのです。それは、私たちの多くが自分自身に自信が持てずにいるからです。けれども、このことはまた、同時に別の意味を持つこととなります。それは、私たちが、自分が何者であるかを見失っているということです。ですから、私たちがもし神様の御前に立つことに尻込みしているとしたら、それは、自分について一番分かっていないのが誰なのかを露呈しているということです。ただ、そもそものところで言えば、それは、神様の御前においてのことではありません。

私たちの多くは、自分のことは自分が一番よく分かっていると、そう思っているように思います。けれども、果たしてそうなのでしょう。今、仮に私が「私という人間は、かくかくしかじかこういう者です。だから、こう思ってください」と皆さんにこう言ったとします。では、それを聞いた皆さんは、私について「ああ、そういう人なんだ」と私の言葉をそのまま真に受けることができるのでしょうか。恐らくは、ほとんどの方は、わたしの言葉をそのまま真に受けることはない、いやできないと思います。なぜなら、ある程度長く一緒にいるということ

はそういうことでもあるからです。けれども、私自身は違います。自分のことをそう強く思っている、だから、私は「かくかくしかじかこういう者です。こう思ってください」と言葉にするわけです。ですから、傍目八目とはよく言ったもので、つまりは、周りで見ている皆さんの方が私についてはよく分かっている、それが実のところでもあるのでしよう。このように、それを実際に言葉にするかしないかは兎も角として、そして、恐らくは、多くの人は、「自分はかくかくしかじかこういうものなんですよ」と、そう言葉に表すことはないのですが、でも、私たちの多くは、自分以上に自分のことをよく分かっている者はいないとそう思っている。そして、それは、祈りにおいても、それと同じことが起こり得るのです。

私たちが様々なところで仮面を被り、自分を隠そうとするのは、自分のことは誰よりも良く自分が分かっている、分かりたいと思っているからです。あっちでもこっちでも仮面を被り、体裁を整えようとするのはそのためです。けれども、イエス様と神様が私たちに望むところは、私たちのそのような心遣い、気遣いではありません。仮面を被り、なりたい自分自身であろうとすることではなく、自分のことが分かっているといなくても、私たちが私たちのままであることです。ところが、そんな神様とイエス様の願いに反して、私たちは、こうありたい、こうあらねば、こうしないと、場面場面に合わせて実に様々な仮面を被ろうとするのです。それは、自分のことを自分が一番分かっていると、また、自分のことを誰よりもよく分かりたいと、そう思っているからです。ですから、そういう意味では、私たちは、人前で大きな声で祈る偽善者、ファリサイ派の人々を笑うことはできません。しかも、笑えないのはこの思い込みだけではありません。それゆえにまた、私たちは返って馬脚を現し、しかも、自分では隠したつもりでいるわけですから、話はそれだけで終わることはないからです。なぜなら、隠そうとすればするほど、また別のところが露わになり、それも知らず知らずのうちに次から次に馬脚を現すことにもなるからです。

ですから、隠そうとすればするほど、神様に対してだけでなく、長く一緒にいる人たちに対しても、言葉にせずともさらに深くこの自分、私というものを知らしめることにもなるのが私たちでもあるのでしよう。従って、自分以上に私たちのことをよく分かっているのは、神様とイエス様だけでなく、こうして長く一緒にいる人たちでもあるのです。時折、もしかしたら、頻繁に、私がこうして共にいる皆さんから「牧師らしくない」と言われるのはそのためです。けれども、その「らしくない」私を牧師としてお立てになったのが神様であり、そして、この「らしくない」私を通して神様の御言葉を取り次がせ、皆さんに対し、御国の扉を開いてくださっているのも私たちの神様でもあるのです。そして、それは間違いのないことです。ただ、皆さんに「らしくない」と言われることを無視することもできません。やはり、私自身、「らしくある」ことも大事なことだとは思っています。けれども、そもそもそのところで言えば、「らしくある」とはどういうことなのでしょう。

私たちはこの日も共に礼拝を献げ、共に主の祈りを祈り、共に御言葉を分かち合い、御名を褒め称えているわけです。そして、その私たちが時間を共にしているのは、日曜日のごくごく限られた短い時間だけではありません。イエス様と共に生きる私たちは、祈りの中に主にある兄弟姉妹とその歩みを共にするものでもあるからです。このことはつまり、主にある兄弟姉妹と私たちは、誕生、結婚、受洗、召天など、人生における節目節目を共にしているということです。葬儀の際、私が誕生、受洗、結婚、召天とこの四つの日時を記すのはそれゆえのことでもあります。それは、召された方だけでなく、残されたご遺族、私たちも、節目節目を共にするからこそ、神様からの恵みを分かち合い、そして、この恵みは祈りの中にその後も続くことにつながります。ですから、私たちの人生を作り上げるものは、このような主にある兄弟姉妹との日々の暮らしであり、それゆえ、私たちは自分一人の力でその人生を全うすることはありません。従って、そう考えるなら、この「私」のことを誰よりもよく知ってくれている家族、主にある兄弟姉妹以上に大事なものはありません。そ

れがあるからこそ、私たちの人生はより豊かなものとされるからです。ですから、イエス様が「もし人の過ちを赦すなら、あなた方の天の父もあなたがの過ちをお赦しになる」とのお言葉をもって、今日の話を終えているのはとてもよく分かります。なぜならば、赦すという私たちの行為が抽象的で漠として掴みにくいものではないように、赦すということは具体的かつ現実に即したものであるからです。

それゆえ、そこにまた私たちの人生、信仰の姿が真実に現されることにもなるのですが、ですから、ここでイエス様が「さあ、一緒に祈ろう」と勧めておられる目的は、単に私たちに特別な祈り、その祈り方を教えるためではありません。主の祈りを通して私たちが知らされることは、私たちの人生であり、命なのです。つまりは、私たちが何者であるかということです。ですから、その私たちに對して、最後にイエス様が赦しについて語っておられるのは、赦しがいなければ、私たちの人生も命も画竜点睛を欠くことになるからです。なぜなら、私たちがもし人を赦すことがなければ、神様に赦されないだけでなく、自分自身の人生、命を生きているとは言えないからです。ただし、この赦し赦される私たちの関係性は、それだけにまた、生やさしいものとはなりません。それは、私たちが人を赦すということが、私たちが相手の落ち度を知るだけでなく、人に赦されるべきものとして、私たちもまた自分自身を問われることにもなるからです。それは、前回も申し上げたように、主に御前にあって丸裸にされ、いいところも悪いところも同じように分かち合っているのが私たちであるからです。このことはつまり、人生を、命を共にしているということは、いいところだけ、調子いいところだけでなく、都合の悪いところも共に分かち合うものだということです。

このように、私たちの信仰は神様とイエス様を見ていればそれだけで良いということにはなりません。こうして共にある主にある兄弟姉妹のことを同時に見つめることがなければ、私たちの人生も私たちの命も神様に喜ばれるものとはなり得ないのです。けれども、それは、言うは易し、行うは難し、では、主の祈りを祈りさえすれば、この、私たちの欠けた

ところが補われることになるのでしょうか。その答えは、誰でもない、私たちすべてがよく知るところでもあるのでしよう。それは、私たちの置かれた現実が、喜びからはほど遠いと、そう思わざるを得ないものだからです。従って、祈りにおいて神様に触れ、また、祈りを通して人に触れるということは、実際にはとても息苦しいものだとも言えるのでしよう。けれども、先週、私たちは、野田先生を通して、そこで私たちが感じる息苦しさについて学ぶことになりました。一人娘の病が癒やされることを願い、イエス様に触ろうとしたヤイロ、イエス様にすがり、その衣に触れ、癒やされた女、私たちは先週野田先生を通してこの御言葉に聞いていったわけですが、では、イエス様に触り、触れるというところから私たちが学んだことは一体何だったのでしょうか。

私たちが赦し赦されるものであるということは、自分の思うがままには生きることができないということです。そして、それは、イエス様に触ろうとすること、触れようとするところにおいて、現されているものでもあるのです。その積極性、消極性のいかに関わらず、それが相手に喜ばれることもあれば、その反対に嫌われることもあり、このように思うの任せないのが人と人との関わりであるからです。そして、それは、私たちが自分のことも人のことも分かってはいないからです。それゆえ、そこで生じる誤解は人に対してだけではありません。私たちは、この喜ばれるかも知れないし、あるいは、嫌われるかも知れないということを、イエス様に向かっても同じことをしているのです。けれども、その私たちとイエス様は共にあり、それぞれにふさわしい形で関わってくださっているのです。つまり、いつ壊れるかも知れない私たちの関わりを支え、守り、導いてくださっているのは、他でもない、私たちのイエス様である、先週、私たちが学んだことはこのことであつたように思いますが。ですから、そのイエス様が私たちに教えてくださった主の祈りを私たちが祈るといふことは、そのイエス様が私たちの間にしっかりと立ち、共にいてくださっているということです。しかし、それがためにまた、私たちはそのことに息苦しさを覚えてしまう。それは、私たちに

向けられたイエス様のその一つ一つの呼びかけが、私たちが決して忘れてはならないところから発せられているものでもあるからです。

主の祈りを祈るとき、イエス様と共に私たちは一体どこに立たされているのでしょうか。それは、対立と矛盾のただ中です。つまり、そのとき、私たちが立つ場所は、十字架の上だということです。私たちが息苦しさを覚えるのはそれゆえのことでもあります。けれども、洋の東西を問わず、歴史を通じて、神様の救いが明らかにされた場所はこの十字架の上の以外他にはどこを探してもないのです。そして、私たちがそのことを知っているのは、私たちが説明するための多くの言葉を手にすることができたからではありません。十字架の上で私たちが経験することは、自分を見失い、言葉を失う経験です。それゆえ、主の祈りを祈り、私たちが十字架という矛盾と対立の極みに立つことと、私たちの生きるこの世の現実に私たち自身が立つということは、私たちが神様に罰せられるかも知れないという、この神様の試みに晒されることでもあるのです。けれども、ここに立てばこそ、いや、立たされるからこそ、私たちはまた知るのであります。自分自身を見失い、言葉を失うこの経験を通して、私たちは、私たちの神様が生きた神様であり、イエス様が味わい知ったのと同じように、その神様に私たちが深く愛されていることを私たちは知らされることになるのです。つまり、私たちが主の祈りを共に祈ることで知らされることは、神様の御前にある私たち自身がそのような私たちであるということです。

しかし、それが分かったとしても、この、赦し赦される関係性に生きるということ、生きねばならないということは、やはり私たちにとっては息苦しいだけのものでもあるのでしよう。ですから、そういう意味では茨の道を歩むに等しいものでもあるのです。けれども、主の祈りが、「国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり」との言葉をもって終わっているように、私たちの人生、命が置かれている場所は、御名の栄光を褒め称えるに最もふさわしい場所でもあるのです。まただから、この茨の道を歩みつつも、「日毎の糧を今日も与えたまえ」と祈る私たちには、私たちが生きるに必要

な一切が与えられもするのです。ですから、日毎の糧が与えられるということでは、いかに糊口を凌ぐかということではありません。私たちには、音楽、舞台、美術といった、私たちが生きる上でなくてはならないものが個々それぞれにあるわけですが、日毎の糧とは、その人にとって生きる上で欠かすことのできないすべてのものでもあるのです。それゆえ、それは、個人的なものにとどまるものではありません。

昨日の隣地建築委員会の開会にあたり、「神に従う人の家には多くの蓄えがある。神に逆らう者は収穫の時にも煩いがある」との箴言の御言葉を読み、祈ったのですが、それは、「日毎の糧を与えたまえ」との思いによるものでもありません。それは、私たちの命の置き所がどこなのかを互いに強く確認したいと願ったからでもありません。そして、そう強く思ったのは、私たちが神様に従い、また逆らうという、そのいずれにも立ちうる者であることを私自身はつきりと意識していたからでもありません。しかし、そうであるからこそまた、このどっちつかずの茨の道がやがて私たちにとっての恵みの道、希望の道となる、御言葉を通して聞いたことはこの神様の御心でもありません。そして、それは、私たちの置かれたこの場所には、イエス様が共にいてくださっているからです。イエス様と共に御名の栄光を褒め称えることの赦された場所に、私たちはこうして生きている。だから、私たちの歩む道がどんなに茨の道に見えたとしても、また、事実その通りであったとしても、私たちの歩む道は、イエス様が共にあるがゆえに希望へと通じているのです。従って、私たちの信仰が活きた信仰と言われているのはそれゆえのことでもあります。そうであればこそまた、主の祈りは祈りの原点、中心、基本と言われてもいるのです。ですから、この原点、中心、基本にしっかりと立って、イエス様に導かれ、希望へと通じるこの一つの道をこれからもご一緒に、できれば、楽しく朗らかに歩み続ける私たちでありたいと思いません。祈りましょう。